

—昨年、第22回「群像」新人文学賞を受賞した作家・村上春樹のデビュー作を、『オレンジロード急行』『ヒポクラテスたち』の大森一樹監督が映画化したものである。

原作は——、
21歳の大学生の「僕」が、生まれ育った海辺の小さな町に帰省しての「1970年8月8日に始まり、8月26日に終る」ささやかな話である。「僕」はなじみのバーにしょっちゅう出かけてビールを飲む。中国生まれのバーテン、親友「鼠」との交遊、左手の指が4本しかない女の子との小さなアバンチュール、それに「僕」がこれまでに寝た三人の女の子の淡い回想……。

青春の終る日が来るのを予感している一青年のひと夏の日を、淡々と、乾いたユーモアに満ちた、アメリカ現代小説風の軽快な文体で描きながら、その底に流れるものは過ぎ行く時への哀切な思いであり、青春へのいとおしみが、新鮮な感性で捉えられている。1970年代初期に青春を過ごした世代の抒情的なメモワールといえよう。



●キャスト
小林 薫
真行寺君枝
巻上 公一
蕭 淑美
室井 滋
阿藤 海
広瀬 昌助
黒木 和雄
狩場 勉
西塚 肇
渡辺 敦郎
寺尾いづみ
古尾谷雅人
坂田 明

●スタッフ
製作：佐々木史朗
企画：多賀 祥介
プロデューサー：佐々木 啓
原作：村上 春樹(講談社刊)
脚本：大森 一樹
監督：大森 一樹
撮影：渡辺 健治
照明：釜田 幸一
録音：中沢 光喜
調音：福田 誠
音楽：千野 秀一
演奏：テレシコス(千野秀一/村上秀一/川端民生/清水靖晃)
編集：吉田 栄子
フォトディレクター：糸川 耀史

助監督：白石 宏一
製作主任：久里 耕介
監督助手：増田信示/渡辺孝好
撮影助手：渡辺真/近藤利幸/小泉英司
照明助手：設楽信義/松浦正志/石川和明
録音助手：立石良二
効果：福島音響効果
装飾：大見商会/高桑道明/大塚三千雄
メイク：小堀なな
記録：桜井恵子
ネガ編集：鈴木 欽
特機：村上喜代美/清水与三吉
宣伝美術：金森周一/池田雅俊
カーサント：スタントグループV/タカハシレーシング

車 輛：杉江義浩/大崎裕伸
製作進行：西村隆/佐々木裕二
声の出演：野沢那智/小原乃梨子/玄田哲章/庄司真由美/内田修
ロケ協力：横田ちとせ/末安順子/本調由香/河村京子/糸谷かおり/横山博子/岡本麻理/樋津潤子/古田美和子/井上佳子/柏木宏美/渡辺美幸/金沢正実/足立由比子/神下晴子/小澤裕之/佐藤祐次/笠井雅郎/田頭泰/長谷川隆/山村和宏/藤本敦朗/阪井一雄/熊谷茂/谷口直樹/佐々木顕

鼠の映画原案：8ミリ映画「土曜り」(杉山王郎・作)より

鼠の映画音楽：曲・演奏 ヒカシュー
TVの音声：「彼らは魔馬を撃つ」(角川文庫版)
ホレス・マクコイ著 常盤新平訳より
Tシャツデザイン：宮崎祐治
写真提供：共同通信社/朝日新聞社/毎日新聞社/サン・テレ・フォト・ワイド・ワールド・フォトズ
撮影機材：PANAVISION/三和映材社/不二技術研究所
照明機材：京都映画
特殊機材：大映映画京都撮影所効果部/明光セレクト

録音スタジオ：日映録音/イノベスタジオ
音楽スタジオ：テイチク会館
タイトル：テイニシムラ
現 像：東洋現像所
協 力：VAN/銀座三愛/エスベランサ/ラジオ大阪/国鉄ハイウェイバス/阪急不動産/西宮球場/帝国不動産/白山不動産/HALF TIME/ヤマハ神戸店/六甲教会/キングスアームズ/芦屋市民プール/芦屋国際ローンテニスクラブ/芦屋サニービル有宝不動産/三恵商事/トップフード/酒蔵たから/アートのスペース/赤坂診療所/新丸菱海運線/ドレサージュ編集室/月刊神戸っ子/プレイガイドジャーナル/ブギウギ・オフィス/ローズガーデン/東京ビデオセンター/ビーターキャット

シネマハウト+ATG提携作品
カラー・ビスタビジョンサイズ・1時間40分

atg

あらゆるものは通りすぎる。
誰にもそれを捉えることはできない。

アートシアター 6



大森一樹監督作品

12月上旬ロードショー
特別鑑賞券 (一般¥1,200) 好評発売中
学生¥1,100

国電有楽町駅中央口前
アートシアター 有楽シネマ (201) 3066

上映時間=11:00(日・祝)/12:50/2:50/4:50/6:50
当日料金=一般¥1,500/学生¥1,300

風の歌を聴け



ジェイ「そんな風に見えるのよ。
昔からそんな気がしたよ。優しい子なのにね、
あんなにはなんていうか、
どっかに悟り切ったような部分があるよ。
……別に悪くいってるんじゃない」
僕「(うなづいて) わかってるよ」
ジェイ「ただね、あたしはあんたより20も年上だし、
その分だけいろんな嫌な目にもあつてる。
だから、これはなんていうか……」
僕「(苦笑いで) 老婆心」
ジェイ「そう」
僕、笑つてビールを飲む。
僕「鼠には僕の方から言い出してみるよ」
ジェイ「うん、それがいいよ」



「ねえ、私を愛してる？」
「もちろん」
「結婚したい？」
「今、すぐに？」
「いつか……もつと先によ」
「もちろん結婚したい」
「でも私が訊ねるまでそんなこと一言だつて
言わなかったわ」
「言い忘れてたんだ」
「……子供は何人欲しい？」
「3人」
「男？ 女？」
「女が2人に男が1人」
彼女はコーヒードの中のパンを嚙み下してから
じつと僕の顔を見た。

生きなおせ、今ノ

「嘘つきノ」
と彼女は言った。
しかし彼女は間違っている。
僕はひとつしか嘘をつかなかった。

君の抜けてきた井戸は
時の歪みに沿つて
掘られてるんだ。
つまり我々は
時の間を
彷徨っているわけさ。
宇宙の創生から
死までをね。
だから我々には
生もなければ死もない。
風だ。



かつて誰もがクールに生きたいと
考える時代があった。
高校の終り頃、僕は心に思うことの
半分しか口に出すまいと決心した。
理由は忘れたがその思いつきを、
何年かにわたつて僕は実行した。
そしてある日、僕は
自分が思っていることの
半分しか語る、ことのできない人間に
なっていることを発見した。

夏の香りを感じたのは久しぶりだった。
潮の香り、遠い汽笛、女の子の肌の手ざわり、
ヘヤー・リンズのレモンの匂い、夕暮の風、淡い希望、
そして夏の夢……。

